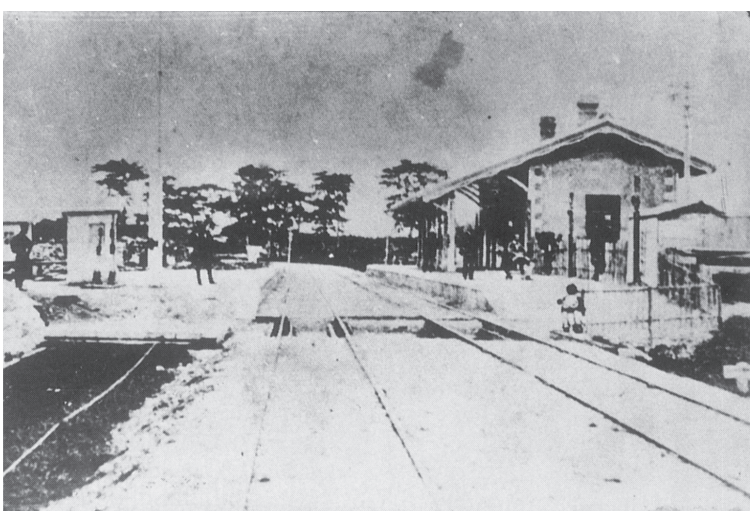
近

代



開業当時の住吉駅（JR 住吉駅提供）

大政奉還ののち、慶応四年（一八六八年七月）、近在の天領は兵庫県となり、その初代知事に伊藤博文が就任する。他方、尼崎藩領の村々は明治四年（一八七一）七月の廃藩置県で尼崎県と改められ、さらに同年十一月にこの尼崎県は兵庫県に吸収される。そして郡区町村編制法が明治十一年（一八七八）に制定されるとこのあたりは、一区三十三郡の兵庫県の一画として菟原郡とされた。ついで、明治二十二年（一八八九）の市制、町村制の施行は、東灘の地域に五つの行政町村を誕生させた。つまり深江・青木・西青木の村々は合して一行政村を組織し、旧庄名にちなんで本庄村と称した。大きな住吉村は単独で一行政村を成立させ、魚崎・横屋は魚崎村を形成した。郡家・御影・東明・石屋も併せて御影町となった。残る森・中野・小路・北畑・田辺の本庄の村々は、旧山路庄の田中・岡本・野寄と一体になって行政村を生み従来の両庄名から頭文字を採って本山村を称することとなった。後に魚崎村に町制が施行されて東灘区成立前の五か町村が誕生した。ところで明治二十九年（一八九六）に自治体としての郡の設置に際して、旧来の武庫・菟原・八部の三郡域に、武庫郡が新設された。

この間、明治七年（一八七四）の大阪・神戸間の鉄道開通では住吉にステーションが設けられ、明治二十二年（一八八九）には東海道全線が開通している。さらに、明治三十八年（一九〇五）の阪神、大正九年（一九二〇）の阪急の両電鉄や、昭和二年（一九二七）の阪神国道電車の敷設は、この地方を阪神両市と直結させた。農村はしだいに変貌した。人口は徐々に増加し、近世以来の産業は一段と活況を呈した。灘の生一本はつとに全国にとどろき、御影石の切出しも増大し、水車による製粉はこのあたりに素麺（そうめん）業を成長させていた。浜辺には少しずつ工場も建ち始めていく。また住吉や御影は高級住宅地として知られたのである。

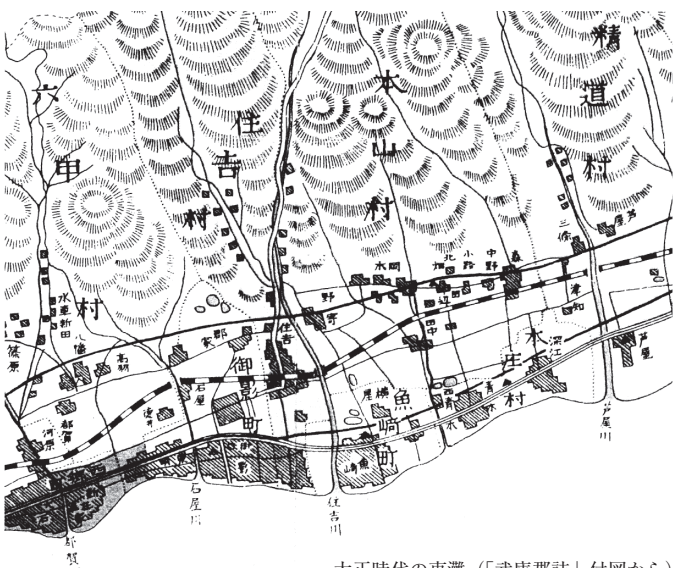
しかしその発展も常に順調であったとは言えない。昭和十三年（一九三八）の阪神大水害では、住吉川や石屋川は泥水を区域に氾濫させた。昭和二十年（一九四五）の空襲は、ほぼ全区域を焼土と化して、人々の生活を破壊しつくした。

こうして、進歩を続けた東灘の地は、苦難の中に、近代という時代を終えたのである。

村界の碑

住吉川下流の西岸は、古くから住吉・魚崎両村の間の境界争いが行われていた。その和解成立と境界を示す大きな石碑が、六甲ライナー「魚崎駅」北側の「花の広場」（住吉川沿い）に建てられている。碑の表面に「是ヨリ北　住吉村　世話掛　山下八郎兵衛」、他面に「是ヨリ南　魚崎村　世話掛　下浦清兵衛」そして側面に「明治十四年三月」と刻まれている。

村界の碑



大正時代の東灘（「武庫郡誌」付図から）

御影標柱　阪神御影駅南側広場

明治六年（一八七三）の太政官達四一三号で、政府は、江戸時代の街道の不正確な里程を測りなおし、従来の一里塚に代って里程標を立てることを命じた。兵庫県は、相生橋の西、今の神戸駅東のＪＲガードのあたりに、明治七年（一八七四）、木の標柱を立て、明治四十三年（一九一〇）二月、高さ十尺の石柱に立て替えた。これが今、元町本通商店街西端外れの緑地に保存されている兵庫県里程元標である。

さて御影の石柱は、大正二年（一九一三）二月に立てられた武庫郡御影町道路元標で、四面に、

・神戸元標へ　弐里五丁九間参分
・六甲山を越へて有馬標柱へ　参里弐拾弐丁参拾五間四分
尼崎標柱へ　四里四丁弐拾六間九分
守部を経て伊丹標柱へ　四里参拾壹丁拾参間五分
・西宮標柱へ　弐里五丁弐拾八間五分
兵庫縣
管轄界下河原標柱へ　五里拾弐丁参拾六間四分
大阪府
神崎標柱へ　五里拾参丁五拾壱間九分
・兵庫縣武庫郡御影町ノ内御影町

と刻まれていた。

御影標注

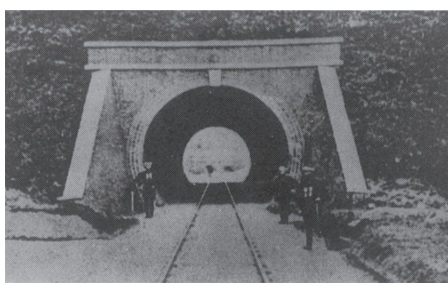
石屋川鉄道トンネル

東京・横浜間につづいて、明治七年（一八七四）に神戸と大阪を結ぶ鉄道が開通し、その間に三宮・住吉・西宮・神崎の駅が設けられた。

集落の発達した海岸地帯に計画された当初の路線は、「汽車の出すゴヘラ（石炭）の煙で酒が腐る」という酒造家の反対にあって挫折し、山麓部を通ることに変更された。しかし、そこでは石屋川・住吉川・芦屋川が天井川を形成していたため、困難な川底トンネルを掘らねばならなかった。ジョン・ダイアックやトマス・グレーなど外人技師によって、明治三年（一八七〇）十月二十四日から九か月の月日をかけて完成された石屋川トンネルは、日本最初の鉄道トンネルだった。イギリスの新聞『イラストレイテッド・ロンドンニューズ』は、文明化時の日本のこの工事を次のように英国民に報道している。

「大阪は…鉄道によって神戸の港と連結されている。…すでになされたこの線の工事には、かなりの工学上の長所がある。三つのトンネルがあるが、そのひとつは芦屋川の下をくぐるもので、延長三百六十五フィートあり、日本における煉瓦製造および組立工事のうちでもっとも立派なものだ……他の二つは、石屋川と住吉川のそれで、ともに第一にあげたものよりは短く、単線しか通せない円形アーチ形のものである。……いずれも三つの山間の急流の川底の下を横切って掘られ、線路はけわしく海に向って切り立つ山の麓に沿って走っている」。（一八七六年九月二日付）

なお工事を指導したジョン・ダイアックは横浜外国人墓地に、トマス・グレーは神戸の修法が原外国人墓地に永眠している。



石屋川鉄道トンネル
（『むかしの神戸』から）

住吉ステーションの碑　御影本町二丁目二

明治七年（一八七四）、大阪・神戸間に鉄道が建設され、その間に神崎（かんざき）・西宮・住吉・三宮の駅が設けられた。御影本町二丁目の白鶴酒造寮東南かどに、西国街道を通る旅人に住吉駅を教える道しるべが立っている。明治十四年（一八八一）六月に、土地の嘉納治良平・萬田為介らによって建立されたもので、表面に「従是住吉ステーション迄九丁四十五間」とある。

住吉ステーションの碑

有馬道

江戸時代の六甲越えの有馬への道（参照81ページ）は、東灘区森から風吹岩・東お多福山・雨ヶ峠・本庄橋・六甲山最高峰東・射場山腹をへて、灘地方と有馬とを直結していた。しかし、明治七年（一八七四）に大阪・神戸間に鉄道が通じて駅が住吉に開設されると、これまでの山道に代って、駅から住吉川ぞいに山中に入り、本庄橋のところで旧六甲越え道に合流する道が利用されるようになった。これが住吉越えの有馬道である。『有馬温泉誌』には、「路は停車場（すてしょん）より北西の方山間に向ひ渓流に沿うて進めば次第に上る。此間渓水の両岸絶壁にして奇石怪巌並び峙ち眺め面白し。七輛場・森安・三条谷とて各茶屋あり……」という。

多くの旅人の中には、明治二十三年（一八九〇）にここを通って紀行文をのこした（参照112ページ）幸田露伴もいた。明治二十年代の住吉駅は有馬への表玄関だったのである。

しかしこの道も、交通の発達の中で次第に衰えていった。つまり明治三十二年（一八九九）の阪鶴鉄道（今

のＪＲ福知山線）の開通と三田・生瀬の駅の開業によって、住吉越えで有馬を訪ねる人々は姿を消していった。昭和三年（一九二八）には神有電鉄（神戸電鉄）が通じ、昭和十三年（一九三八）の水害で谷すじの道は壊滅し、交通の歴史をひめて、谷川のせせらぎに包まれ深い眠りについた。

昭和四十八年（一九七三）、この道はふたたび眠りからさめた。「太陽と緑の道」の一環として住吉道として整備されたのである。

有馬道の碑（本住吉神社東）

有馬道の道標石

住吉駅から有馬への交通はすたれてしまったが、駅の北方、有馬道商店街の名には往時の旅のおもかげがしのばれる。その商店街の北はずれの三叉路には「右モ左モ有馬道」という親切な道しるべがある。また、本住吉神社の東南にも、約一・五ｍの高さの「有馬道是ヨリ北江九十丁」という道標が残っている。

「右モ左モ有馬道」碑（有馬道商店街北）

住吉駅より有馬道

（明治二十三年）五月六日の朝いと夙く起き出でて…神戸行きの一番汽車に乗りて、有馬の温泉へと心ざすまま大阪をも突と通り抜け、住吉々々と駅夫の呼ぶ時心得たりと飛び下りけるが、此所より有馬へは三里に足らぬところなれど打仰ぐばかりの山を望みて上ることなれば……遂に二挺の駕籠を連ねて路の辺の草花を品し樹ぶりを評し合ひなどしつつ長閑に進むこととなりぬ。…瑩り廻りて上るすがら前には摩耶六甲の山山の赫く禿げたるところ〴〵に小松の簇生へるを見、背には晴たる海の平らかにして日の光りを受けたる帆舟の彌白く見ゆるが遠く近く浮べるを見るなど眺望の興少からず、はや有馬に着きたり……。

幸田露伴『まき筆日記』より

西　方　寺

御影本町六丁目三

浜街道の風情をわずかに残していた御影本町の通りに西方寺がある。浄土真宗西本願寺末で、阿弥陀如来を本尊とし、山号を影松山という。明治二十五年（一八九二）、このあたりの大火で焼失し、開基創建年月も不詳だが、宝暦六年（一七五六）に今の寺名がつけられたとされる。

明治三十八年（一九〇五）に建物は再建されたが、現存する鐘楼・門・井戸屋形などの彫り物はみごと。門のすかし彫りの一角に「堺市彫刻師西川竹次郎勝利」の名がみえる。

西方寺山門の彫刻

二　楽　荘

大谷光瑞（こうずい）は、明如上人の子として明治九年（一八七六）に生まれ、西域探検に大きな功績を残した西本願寺第二十二世法主である。二楽荘は、彼の別荘であった。彼が明治後期に、休養地としてのみならず、門弟の才子を集めて教育の場を造ろうと考えながら、選んだのが、岡本の天王台であった。

明治四十年（一九〇七）に着工された建物は、光瑞が感銘をうけていたインド風の外観が与えられ、先の尖った丸屋根をもつ二階建（一部三階建）の建物で、赤と茶のサンド・ストーンで外装され、異国風な姿を山腹にあらわしていた。また光瑞は、この邸から山麓までケーブルカーを建設、邸内には支那室・インド室・アラビア室などがある豪壮なものだった。

この建物は、のちに久原房之助に買収され、甲南学園に寄贈されるはずであったが、不況時に転売されて、昭和七年（一九三二）に焼失してしまった。

大正７年当時の二楽荘（学校法人甲南学園提供）

住吉学園　住吉本町三丁目三

阪急電車の南、住吉川の西岸ちかくの閑静な住宅地の一角にある。

明治時代、住吉は高級住宅地として開かれ、多くの名士が邸を構えた。彼らが明治四十五年（一九一二）に社交クラブとして、観音林倶楽部を設立したのが、今の住吉学園の地。構内のすずしい木陰の東すみには、昭和十三年（一九三八）の水害の惨禍を伝える流石の碑がある。

なお、新館は、昭和五十七年（一九八二）一月に改築されたものである。

住吉学園

ヘルマンハイツとシーメンス事件

住吉川東の住宅地ヘルマンハイツは、大正時代に内閣を崩壊にまで導いた海軍汚職シーメンス事件の立役者ヘルマンの邸宅跡である。

ドイツの軍事企業シーメンス社の極東支配人として、ビクトル・ヘルマンが本山に来たのは明治末。その石造りの豪邸は、神戸に多いコロニアル・スタイルの異人館と違って、本格的な中世城郭風建築で、ヘルマン屋敷とよばれていた。

大正三年（一九一四）、このシーメンス社東京支店員カール・リヒテルが、同支店から、会社が日本海軍高官に贈賄している事実を示す書類を盗み出し、会社を恐喝していることが明るみに出た。ベルリン地裁がリヒテルに懲役二年の判決を言い渡したというロイター電が、同年一月二十三日に東京の新聞で報じられた。同志会の島田三郎は、海軍高官がビッカース社・アームストロング社・三井物産などからも収賄している事実をつきとめ、政友会の山本権兵衛内閣への攻撃

を開始。ついに内閣は総辞職に追いこまれた。その間、ヘルマンは再三この邸から上京して斎藤実海相と密談している。

このシーメンス事件の結果、ヘルマンは軍法会議で懲役二年・執行猶予三年を言い渡されてシーメンス社を辞した。

彼の一家は大正十四年（一九二五）春の上京まで、この家にいた。彼らが去ってから、屋敷は荒廃し、昭和二十年（一九四五）には空襲にあった。ゲオルグ・デ・ラランゲの設計になる明治末の名建築も、スパイの住んでいたお化け屋敷とうわさされるほど荒んでいった。

昭和四十四年頃、宅地造成によって屋敷は完全に取りこわされ、ヘルマンハイツの名だけが残った。

荒廃したヘルマン邸
（1970 年頃）

●ヘルマン遂に收監

●收監後のヘルマン

●ヘルマン邸を訪ふ

▲眠れるが如き留守宅

▲憂愁深きその前夜

▲ヘルマン邸の大混雑

▲夫人泣いて記者に語る

大正３年２月５日　神戸新聞

神戸大学海事博物館　深江南町五丁目一

神戸大学深江キャンパスの正門を入ると、すぐ右手に海事博物館のどっしりした建物がある。これは昭和四十二年（一九六七）に、神戸商船大学（現神戸大学大学院海事科学研究科・海事科学部）創立五十周年記念事業の一環として建設されたもので、広く海事に関する参考資料を収集し展示して、教育、研究の資料を提供するとともに、海事の啓発に努めるユニークな博物館である。昭和三十三年（一九五八）に学内の一隅にささやかに展示室を持っていた海事参考館を拡張発展させ、その後海事資料館を経て平成十六年（二〇〇四）に現在の海事博物館になった。

収蔵品は広く海事一般に関する資料で、西洋型帆船模型、航海用器具、レシプロ機関模型など多岐にわたっている。中でも気品の漂う朝顔丸船首像や、江戸時代に描かれた豪華な海路図屏風などは逸品である。また、大小約二十隻の和船模型をはじめ、すでに姿を消してしまった和船の部分品の実物、船大工の描いた板図などの和船関係資料は、他に類例を見ない貴重な資料である。（160ページ一覧表参照）

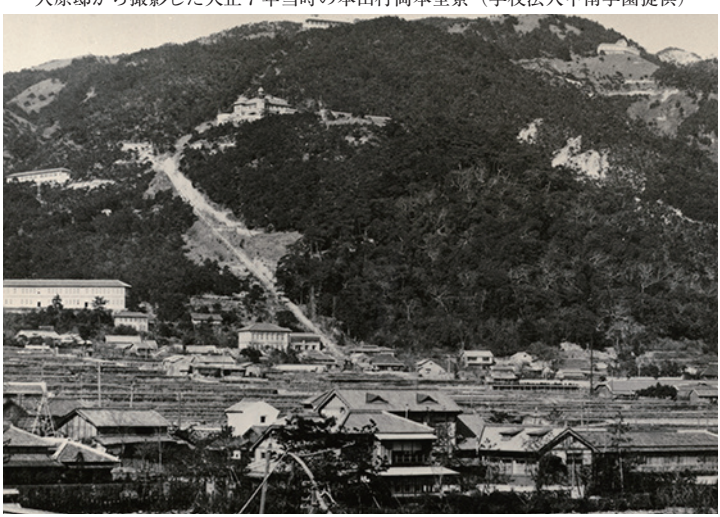
神戸大学海事博物館

久原邸跡　西岡本二・三丁目

住吉や岡本は、芦屋が開かれる以前に、高級住宅地として開発されていった。その象徴として、岡本背後の山腹に建てられた二楽荘と、住吉川東岸野寄の久原邸があげられる。

久原房之助は、明治二年（一八六九）に山口県に生まれ、慶応義塾を卒業後、実業界に進出した。小坂鉱山の経営で頭角をあらわし、久原（日立）鉱業・久原商事・共保生命などを興して久原財閥の基礎を築いた。昭和二年（一九二七）にそれらを義兄の鮎川義介にゆだね、自らは政友会の衆議院議員として政界に転じた。田中義一内閣で逓信大臣をつとめたあと、政友会幹事長・同総裁を歴任する。その間、彼は本山村に住み地域の社会事業にも貢献している。また彼の邸の広大さは、今もしばしば話題となる。現在はその邸跡に、高層住宅が建っている。

久原邸から撮影した大正７年当時の本山村岡本全景（学校法人甲南学園提供）



御影公会堂　御影石町四丁目四

この公会堂は、白鶴の嘉納治兵衛の寄附金によって、昭和七年（一九三二）六月に着工、翌年五月二十日に完成。当時としてはモダンな三階建の建築で、文化的集会におおいに利用された。

昭和二十年（一九四五）の空襲で被害をうけたが、財政的に御影町は修復が困難であったため昭和二十五年（一九五〇）の神戸市編入後、市の手で改修され、昭和二十八年（一九五三）四月に再開された。当時、五百五十名収容の大ホールは市内にもまれで、様々に利用された。その後、国際会館、文化ホールなどの建設で利用者は減少したが、今も、石屋川東側、国道二号線の北に、その気品ある姿をのこしている。

御影公会堂

嘉納治五郎（かのうじごろう）

「柔道の父」と呼ばれ、日本のオリンピック参加・開催に尽力した嘉納治五郎は、万延元年（一八六〇）に御影村（現・御影本町）で生まれた。十歳で父に連れられて東京に移り、開成学校や二松学舎で英語や漢籍を学び、十八歳で柔術を学び始めた。東京帝国大学卒業のころ近代スポーツとしての柔道を創始し、道場「講道館」を開いた。嘉納は「精力善用　自他共栄」を理念として、身体の鍛錬と精神の修養に努めて人格の完成をはかり、社会に貢献することを柔道の目的とした。

職業人としての嘉納は教育者で、第五高等中学校（現・熊本大学）や東京高等師範学校（のちの東京教育大学）の校長を務め、学校体育指導や教員育成に尽力した。神戸では、嘉納の発案で設立された御影教育議会により、明治二十五年（一八九二）に御影幼稚園が開園した。昭和三年（一九二八）には、灘の酒造家と協力して旧制灘中学校（現・灘中学校・灘高等学校）を開校。初代校長の人選などを支援し、開校・入学式

をはじめ、たびたび講演を行っている。

嘉納はスポーツの普及にも強い関心をもち、明治四十二年（一九〇九）に東洋初の国際オリンピック委員に就任した。明治四十五年（一九一二）に開催されたストックホルム大会では、日本選手団長として日本のオリンピック初参加を実現した。また、昭和十五年（一九四〇）の東京大会の誘致に成功したが、大会はヨーロッパでの戦争のため中止となった。昭和十三年（一九三八）、カイロでのＩＯＣ総会を終えてアメリカに立ち寄り、船で帰国する途中に肺炎のため世を去った。嘉納は千葉県松戸市の八柱霊園に埋葬された。

嘉納治五郎　銅像
（御影公会堂地下「御影郷土資料室・嘉納治五郎記念コーナー」）

平成二十九年（二〇一七）、御影公会堂地下に「御影郷土資料室・嘉納治五郎記念コーナー」が設けられた。嘉納の活動を紹介する資料とともに、等身大の銅像が展示されている。（160ページ一覧表参照）

嘉納治五郎生誕地記念碑（御影本町１丁目）

平生釟三郎（ひらおはちさぶろう）

平生釟三郎
（学校法人甲南学園提供）

慶応二年（一八六六）岐阜県に生まれ、高等商業学校（現・一橋大学）を卒業した平生は、明治二十六年（一八九三）に兵庫県立神戸商業学校（現・兵庫県立神戸商業高等学校）校長に就任。その後、住吉村の村会議員を務めるなど、教育社会事業に尽くした。明治四十四年（一九一一）に甲南幼稚園創立に参画、大正八年（一九一九）には岡本の地に旧制甲南中学校を創立、大正十二年（一九二三）に七年制甲南高等学校へと発展した。平生は昭和二十年（一九四五）に八十歳で亡くなり、昭和二十六年（一九五一）に開学した甲南大学を見ることはできなかった。

一方で平生は、甲南病院の設立（昭和六年／一九三一）にも尽力。さらに東京海上火災「中興の祖」とも称された実業家としての手腕を買われ、昭和八年（一九三三）に川崎造船所社長に就任し、再建を果たした。昭和十一年（一九三六）には、広田弘毅内閣の文部大臣に就任した。

平生記念館

住吉本町二丁目二十九－十五

昭和四十九年（一九七四）、甲南学園の同窓会によって平生邸跡に建設。教育者・平生釟三郎の活躍を現在に伝えている。

平生記念館

貴志康一（きしこういち）

明治四十二年（一九〇九）大阪府生まれ。九歳の頃に現在の芦屋市に引越し、翌年から甲南小学校に通うようになった。十歳でヴァイオリンを始め、ミハエル・ウェクスラーにヴァイオリンを、宝塚交響楽団の指揮者のヨゼフ・ラスカに音楽理論を学んだ。当時、東灘の深江には、先述のウェクスラーやラスカなど外国人音楽家が集まった一画があり、貴志康一はここで西洋音楽の基礎を築いた。

貴志康一
（学校法人甲南学園提供）

大正十五年（一九二六）、甲南高等学校高等科を中退し、スイスのジュネーヴ音楽院に留学した。二年後にドイツのベルリン高等音楽学校ヴァイオリン科に入学し、作曲家のヒンデミットや指揮者のフルトヴェングラーとも交流して多大な影響を受けた。やがて貴志は作曲や指揮にも強い関心を持つようになる。昭和九年（一九三四）、近衛秀麿に続いて日本人としては二番目に、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮し、自作の交響曲「仏陀」を発表した。

昭和十年（一九三五）に帰国し、新交響楽団（現・NHK交響楽団）を指揮するなど活躍したが、昭和十二年（一九三七）に病気のため世を去った。二十八歳であった。

甲南学園には「貴志康一記念室」が設けられており、彼の自筆の楽譜やレコード、書簡などが保管されている。

白鶴美術館

住吉山手六丁目一
市バス白鶴美術館前

住吉川の西岸に緑の山地を背にして立つ、青銅屋根の白鶴美術館がある。

白鶴酒造七代目の嘉納治兵衛（鶴翁）は、明治三十年（一八九七）頃から約五十年間古美術品を収集し、ことに昭和初期には中国の青銅器収集に力を入れた。彼は死後に収集品が散逸するのを防ぎ、人々に公開するため昭和六年（一九三一）、財団法人を設立した。昭和九年（一九三四）五月二十六日に開館。現在毎年、春と秋に定期展を催している。収蔵品のうち、商周時代の青銅器や漢～明時代の陶磁器は世界に誇るコレクションであり、日本の飛鳥～鎌倉時代の染織品・金工品・漆器、鎌倉～江戸時代の絵画も貴重な文化財である。二件の国宝のほか二十二件の重要文化財がある。また、中庭にある青銅の灯篭は東大寺大仏殿前の灯篭を写したもので、そのすかし彫りも美しい。

また平成七年（一九九五）には、本館の南側に十七～二十世紀に織られた中東（イラン・トルコ・コーカサス地方）の絨毯を展示する新館が誕生した。十代目嘉納秀郎が収集したもので日本初のカーペットミュージアムである。（160ページ一覧表参照）

白鶴美術館新館（白鶴美術館提供）

白鶴美術館（白鶴美術館提供）

重要文化財　白地黒掻落菴文梅瓶（白鶴美術館提供）

流石碑

住吉本町三丁目三
住吉学園内

急な天井川をなす住吉川は、たびたび氾濫して流域に大きな被害を与えた。

古く、永正元年（一五〇四）の水害は、観音林にあったという禅寺・慈明寺（じめいじ）流（が）れとよばれて伝説化している。近くは、昭和十三年（一九三八）の阪神大水害の恐怖が記憶に新しい（参照127ページ）。住吉学園内にある流石の碑は、この災害を記念して建てられた。

水害で流れてきた巨岩をそのまま利用し、碑の高さは出水時の泥水の高さを示している。約三十トンのこの巨岩の台座には次のように刻まれている。

「七月五日午前九時三十分連日ノ降雨ニ加フルニ朝来ノ一大豪雨ハ六甲背山ヲ削リテ見ルモ恐シキ山津波ヲ起シ住吉川畔一帯ヲ初メ殆ド全村ニ互リテ濁流土砂奔馬ノ如ク荒レ狂瀾怒濤幾千貫ノ巨巌唸リヲ生シテ飛ヒ其ノ凄惨ナル光景慄然トシテ言語ニ絶ス……三十三ノ生霊ヲ呑ミ流失全壊ノ家屋百有余全村七割二千七百戸ニ多大ノ災禍ヲ興ヘ文化ヲ誇リシ住宅街モ一朝ニシテ土砂堆積シ巨巌磊砢タル荒野ト化セリ……」

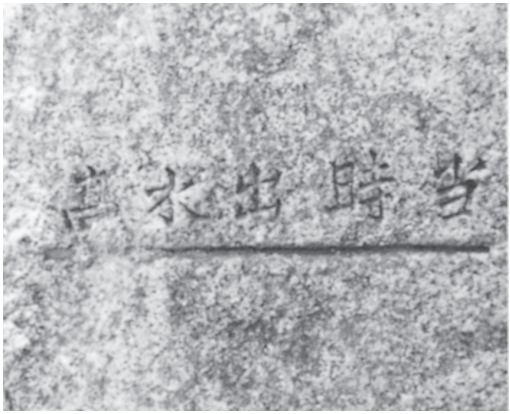
また、甲南小学校正門付近にも、洪水に対して「常ニ備ヘヨ」と書かれた平生釟三郎の碑がある。

流石の碑

洪水水位の石碑

住吉台二番
市バス白鶴美術館前

住吉川が東谷と西谷とにわかれる落合橋の、やや東に立つ『水災記念』碑には、台座の右わきに阪神大水害の最高時の洪水水位が刻まれている。



洪水水位の碑

昭和 13 年阪神大水害－住吉川国道 2 号線付近－
（神戸市文書館提供）

春日神社

北青木四丁目二十

天児屋根命を祭神とする旧西青木村の氏神。緑起は判然としないが、このあたりはかつて山路荘であり、荘総氏神の本住吉神社の祭日には、この春日神社から西青木のだんじりが本住吉神社まで曳かれて行った。だんじり倉は、境内に現存している。

拝殿西方には、昭和十三年（一九三八）の阪神大水害の記念碑がある。濁流によってこのあたりに流されてきた巨石を利用した碑の表面には「七月五日阪神間六甲山麓ヲ襲ヒタル水災、天上川（神社すぐ西の川）ヲ氾濫セシメ遂ニ西青木全區五百餘戸ニ甚大ナル水禍ヲ及ボセリ…」と刻まれている。

春日神社

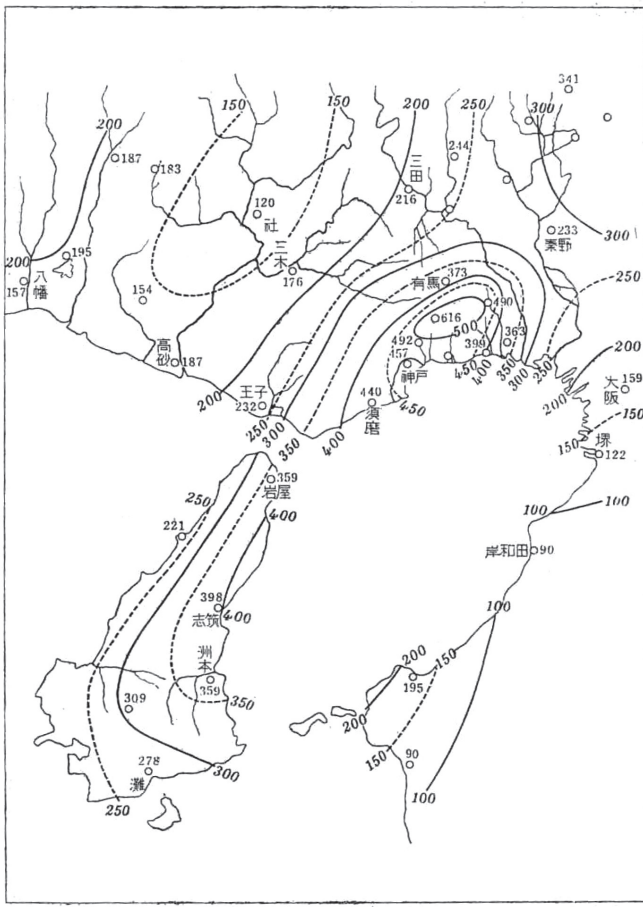
水害の記念碑

阪神大水害

「細雪」　谷崎潤一郎

七月五日の朝の事であった。いったい今年は五月時分から例年よりも降雨量が多く、入梅になってからはずっと降り続けてゐて、七月に這入ってからも、三日に又しても降り始めて四日も終日降り暮してゐたのであるが、五日の明け方からは俄に沛然たる豪雨となっていつ止むとも見えぬ気色であった。……住吉川の氾濫の状況がやや伝はって来て、国道の田中から以西は全部大河のやうになって濁流が渦巻いてゐること、従って野寄、横屋、青木等が最も悲惨であるらしいこと、国道以南は甲南市場も、ゴルフ場もなくなって、直ちに海につながってゐること……

（本山駅）構内にも刻々侵入しつつあるので、入り口に土嚢や蓆を積み上げて、駅員だの学生だのが代る〴〵、隙間から漏れて来る水を帚木で掃き出してゐる。……田中の小川が氾濫していて、それに架した鉄橋の上にさしかかっていた。……六甲の山奥から溢れ出した山津浪なので、真っ白な波頭を立てた怒濤が飛沫を上げながら後から〳〵押し寄せて来つつあって、恰も全体が沸々と煮えくり返る湯のように見える。たしかに此の波の立ったところは川でなくて海、……どす黒く濁った、土用波が寄せる時の泥海である。……漸く三時頃になって雨が全く止み、ところ〴〵に青空が覗き始めると、次第に少しづつ退いて行った。……あれから又いろ〳〵と聞き込んだ……たとへば住吉川の上流、白鶴美術館から野村邸に至るあたりの、数十丈の深さの谷が土砂と巨岩のために跡形もなく埋ってしまったこと、国道の住吉川に架した橋の上には、数百貫もある大きな石と、皮が擦り剥けて丸太のやうになった大木とが、累々と積み重なって交通を阻害してゐること、その手前二三丁の南側の、道路より低い所にある甲南アパートの前に多くの屍骸が流れ着いてゐること、それらの屍骸は皆全身に土砂がこびり着いてゐて顔も風態も分らぬこと、神戸市内も相当の出水で、阪神電車の地下線に水が流れ込んだために乗客の溺死者が可なりあるらしいこと……。



昭和13年7月3日～6日までの総雨量図（『神戸市水害誌』より）　単位は㎜

谷崎文学と東灘

大正十二年（一九二三）、関東大震災に遭った谷崎潤一郎は、芦屋の知人宅に身を寄せたあと、一旦、京都に住み、翌年三月本山町北畑の本山第一小学校東隣りに居を移した。ここで『痴人の愛』が書かれ、大正十五年（一九二六）に岡本へ移転して『蓼喰う虫』が書かれたというが、これらの旧宅は現存しない。

昭和三年（一九二八）の秋に、彼は岡本梅林近くに土地を買い望みどおりの間取りの家を建てて落ちつくが、これが岡本七丁目十三にあったクリセル邸である。この家は四面観音開きの総桧造りで、和・洋・中の混った装飾をもつ独特な建物であった。ここに住んでいるあいだに、潤一郎は瀬戸内海の家島を旅して『乱菊物語』を、吉野を訪れて『吉野葛』を執筆した。

昭和六年（一九三一）に、この岡本の家を去って、魚崎北町（当時の横屋）や芦屋に住んだあと、昭和十一年（一九三六）の秋に住吉村反高林（現在の住吉東町一丁目）に移り住んだ。その間に丁未子夫人との結婚や離婚、『春琴抄』の完成、松子夫人との結婚があっ

在りし日のクリセル邸

た。

この反高林の家（今の倚松庵）で、彼は、代表作『細雪』にも描かれている昭和十三年（一九三八）の阪神大水害を体験したわけである。昭和十八年（一九四三）には、ここから住吉川をへだてた対岸、反高橋東詰（当時の魚崎町魚崎）に転居した。その家は昭和二十年（一九四五）に空襲にあって焼失し、彼はのちに岡山県津山に移っていった。

大正末から昭和前期の二十年間を過した谷崎潤一郎は「わが宿は菟原住吉芦屋潟海のながめを南に見る」と、この地を愛し、この地はまた彼の作品に多くの影響を与えた。このような谷崎文学と東灘の関係を記念して、彼の生誕百年にあたる昭和六十年（一九八五）に二つの文学碑が建てられた。住吉本町の阿弥陀寺の門前の歌碑には昭和十九年（一九四四）四月十五日に熱海にむかって疎開する際に住吉駅で詠んだ「故里の花に心を残しつつ立つやかすみの菟原住吉」の歌が、また、『細雪』にも描かれた本山第二小学校の校庭には『細雪』の一節が刻まれている。

歌碑（阿弥陀寺）

文学碑（本山第二小学校）

倚松庵

住吉東町一丁目
阪神魚崎駅

東灘から芦屋にかけて数ある谷崎潤一郎旧宅のうち、旧住吉村反高林の家は、現在「倚松庵」の名で保存、一般公開されている。

谷崎が昭和十一年（一九三六）から七年間住んだこの家は、昭和四年（一九二九）に建てられた簡素な外観の日本家屋で、一階に洋間二間・和室二間に台所、二階に三つの和室がある。理想の女性松子に依ることにかけて倚松庵と号したとされる谷崎は、ここで松子やその妹の重子や信子らと生活し、彼女らをモデルに『細雪』を構想、執筆した。また、ここで谷崎は、昭和十三年（一九三八）に『源氏物語』の現代語訳を完成している。

建物はもとは約百五十m南にあったが、平成二年（一九九〇）に現在地に移築・公開されることになった。館内には、谷崎作品も展示されている。

倚　松　庵

朱鳥居（あかとりい）と空襲

森南町三丁目
市バス、阪神バス森

稲荷筋の道が、国道二号線と交叉する北側に、稲荷筋をまたいで高さ五・八mの大きな鳥居が立っている。昭和二年（一九二七）に建てられたこの鳥居の前には、蜀山人が『革令紀行』にも記している「稲荷之社従是三町」という石碑が立っている。西国街道から森稲荷への分岐点だ。

が、この朱鳥居はいたましい歴史をも秘めている。第二次世界大戦末期の昭和二十年（一九四五）五月十一日の空襲の時である。

午前八時四十分、大阪・京都・兵庫に空襲警報発令。青木にあった川西航空機甲南製作所（今の新明和工業）も攻撃目標だった。そのことは、五月五日夜半に撃墜されたB29の飛行士が持っていた航空写真から、すでに知られていた。その写真には、十一日の川西航空機爆撃計画、付近の目印としてこの朱鳥居が記入されていた。その日、六十機のB29は灘・東灘の地域に数百発の爆弾を落した。工場には二七〇発、商船学校には約三〇発の爆弾が落された。この日、一二〇三人が死亡し八二四人が傷ついた。「神戸女子薬学専門学校の救護隊は医療隊・担架隊を編成・七十の担架を血に染めながら負傷者の救護にあたり、三kmを往復して重傷者を学校に収容、かいがいしき働きをみせた。爆弾で飛散した犠牲者の一片の肉塊・手足までもていねいに拾いまわっていた（『神戸市史第三集』）。」

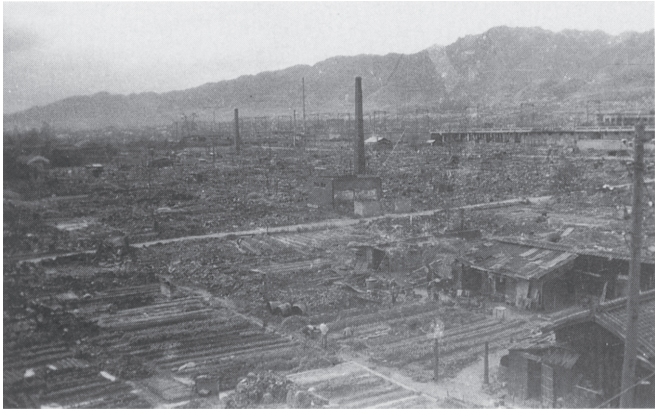
さらに、六月五・七日、八月五・六日の空襲で、市民生活は完全な破壊にさらされた。

朱鳥居と道標

米軍の空襲

「火垂るの墓」　野坂昭如

六月五日神戸はB二九、三百五十機の編隊による空襲を受け、葺合・灘・須磨及び東神戸五か町村ことごとく焼き払われ、中学三年の清太は勤労動員で神戸製鋼所へ通っていたのだが、この日は節電日、御影の浜に近い自宅で待機中を警報発令されたから……西へ歩いて、石屋川の川床の、昭和十三年の水害以後二段になったその上段のところどころにあるくぼみに身をかくした……草の根たよりに堤防を這いずり上る。上ってみると御影第一第二国民学校御影公会堂がこっちへ歩いてきたみたいに近くみえ、酒蔵も兵隊のいたバラックも、さらに消防署松林すべて失せて阪神電車の土手がすぐそこ、国道に電車三台つながって往生しとるし、上り坂のまま焼跡は六甲山の麓まで続くようにみえ、その果ては煙にかすむ……。



▲
旧御影町役場屋上から写したもの。高架は阪神電鉄。一面焦土となっている。
（昭和 20 年 6 月 5 日の空襲から数日後撮影）

◀正面の校舎は当時の御影第一国民学校。左端は御影警察署（同上）
（藤田写真機店提供）